

聞いた

戦前

戦中

戦後

炭屋さん栄えて新宿栄える

「何でもあり！」 はやくわづな

山田歌子さん

(大正十四年生まれの九十一歳)

喜々崇介さん

(昭和九年生まれの八十二歳)

ともに新宿に生まれ、
いまも新宿に深く関わる生糸の
新宿つ子。
そのお二人に、
関東大震災後、
急速に栄えた街の思い出と、
いまの印象を聞いてみた。

——中央線といえば、やはり新宿がシンボルだと思います。新宿あつての中央線、そういうとと思うのですが、独特の文化を育み、それが沿線の文化に影響を与えたと思える新宿は、幼いころどう映っていましたか。

山田 父から聞いた話では、戦前、さらにその昔は、新宿よりもいまの四谷のほうが栄えていたそうです。あのあたりには花柳界があつて、新宿なんか問題にならないくらい賑やかだつたそうです。

喜多 四谷見附あたりね。

山田 あそこには料亭があつたから芸者さんたちの花柳界があつて、当時の新宿は問題にならないくらいいところだつたんですって。

喜多 やっぱり新宿が栄えだしたのは、新宿駅ができるからでしょう。駅自体は明治時代からありますが、とくに新宿の東口が発展してきたのは昭和七年とか八年くらいだと思います。駅ができるずっと前は、東口よりも、ずっと西、成子坂のほうが繁盛していたそうです。当初、そのあたりに駅を整備するということだ

が多かつたですね。

山田 うちはそのころ、貨物列車駅の近く、現在、スポーツ用品店「ヴィクトリア」がある場所で旅館を経営していたんですが、ずいぶんと山梨や長野からのお客さんがお泊まりになられました。

喜多 うち（株式会社大阪屋商店）もそうだし、紀伊國屋書店さんもそうでしたが、とにかく炭屋がとても多かつたですね。

山田 お客様が山梨や長野から来ますでしょ。だから、戦争中の物がなかつた時代にも、ずいぶんとお客様からいろいろな山の幸をもらつて助かつたのを覚えています。山梨の方は絹織物を商い、長野の方は炭を商つていましたね。新宿に出てきて、商談をして、また中央線で帰つていくんですね。

——長野から新宿に届いた炭を、炭屋さんが東京といふた街といえるんですね。

喜多 そもそもしません。戦前、東口が栄えてから大消費地でさばく。そういう意味で新宿は炭がつくった街といえるんですね。

喜多 いまの南口の高島屋があるあたりが貨物列車の停車場だったんです。そこに山梨や長野方面から荷物が届く。中央線で運ばれてくるわけです。それでどうか、新宿駅の駅前には長野から届く炭を扱う炭屋